

英語聴解力増強のための一考察

古川 尚子

はじめに

本学では人間社会学部に入学した学生は基礎教育科目第一外国語（英語）6単位の履修が必修として義務付けられている。6単位、すなわち、6科目を履修するのであるが、その6科目で「speaking」、「listening」、「reading」、「writing」の4技能の習得をめざす。開講科目の一つである「English in LL」ではリスニング能力を伸ばすことを主目的として一年次生を対象として開講されているが、多くの受講者は英語、特にリスニングに関しては全く自信がないといい、実際に英文の聞き取りの力は低いことが第一回目の授業で行うリスニングの基礎力を見るテストの結果からもわかる。中学校の学習指導要領では外国語の目標として、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」とある。また、高等学校の学習指導要領では外国語の目標として、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。」としている。高等学校においては外国語は選択教科であり、次の科目から構成されている。「英語Ⅰ」、「英語Ⅱ」、「オーラルコミュニケーションⅠ」、「オーラルコミュニケーションⅡ」、「リーディング」、「ライティング」である。「オーラルコミュニケーションⅠ」の目標は「日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。」であり、「オーラルコミュニケーションⅡ」では、「幅広い話題について、情報や考えなどを整理して英語で発表したり、話し合ったりする能力を伸ばすとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。」とある。以上のように中学校、高等学校の学習指導要領においてはコミュニケーション能力の養成が第一義として謳われており、音声指導が重視されているから相当の力をつけて大学に入学していてもよいのであるが、実際にはリスニング、スピーキングに関する指導に割かれている時間は少ないようである。全体のカリキュラムの中で英語の時間数に限りがあり、高等学校、大学の入学試験のこともあり、リスニング、スピーキングまで手がまわらない、ということが実情であろう。実際に使える英語の習得のためにはどうしたらよいのか、今回はリスニング面に焦点を当てて考えてみたい。

1. 中学校における「聞く」に関わる言語活動

学習指導要領には「英語」の目標の(1)に「英語を聞くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。」とある。内容の項目で、英語を理解し、英語で表現する能力を養うため、3年間を通して行う言語活動が各スキル毎に細かく規定されている。

「聞くこと」

主として次の事項について指導する。

- (ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取ること。
- (イ) 自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、具体的な内容や大切な部分を聞き取ること。
- (ウ) 質問や依頼などを聞いて適切に応じること。
- (エ) 話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解すること。

言語材料としては、目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いて行わせる、とあり、音声に関する言語材料として取り上げられているものは次の通りである。

- (ア) 現代の標準的な発音
- (イ) 語と語の連結による音変化
- (ウ) 語、句、文における基本的な強勢
- (エ) 文における基本的なイントネーション
- (オ) 文における基本的な区切り

ここでいう「現代の標準的な発音」とは、国際的に通用する英語の音声ということであるが、日本語の音声体系と英語の音声体系は大きく隔たっているため、言っている内容は正しくても、なかなか相手にそれが伝わらないという状況が多くみられる。日本語を母国語としている者がより英語的な音声を習得するためには、いくつかのポイントに注意を払わなければならない。英語と日本語の相違を考えると、まず、リズムの違いに気が付く。日本語は強勢のある音節が等間隔であられる syllable-timed rhythm であるのに対し、英語は強勢のある部分と強勢のない部分との組み合わせからなる stress-timed rhythm であるからである。英語の音声聞き取り難いのは速さの問題だけではなく、リズムの問題であることが多い。日本語のリズムでは英語のリズムに乗ることはできない。そして、語のアクセントの違いに留意しなければならない。又、文のアクセントでは日本語の高低アクセントから英語の強弱アクセントへ転換しなければならない。そして、個々の音声については日本語の音声とは異なる子音を英語の子音の発音に切り替え、似てはいるけれど異なる音声である英語の母音に切り替えていかなければならない。英語の標準的な発音をマスターし、使いこなしてゆくことはコミュニケーション能力の基礎を養う英語学習の上で基本的な事項である。

1. 高等学校における「聞く」に関わる言語活動

高等学校においてコミュニケーション能力の中でも主なものである「聞く」、「話す」能力を養うのは主として、「オーラルコミュニケーションⅠ」と「オーラルコミュニケーションⅡ」である。「オーラルコミュニケーションⅠ」で行われる言語活動は学習指導要領で次のように規定されている。

2 内容

(1) 言語活動

生徒が情報や考えなどの受け手や送り手になるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のようなコミュニケーション活動を行う。

- ア 英語を聞いてその内容を理解するとともに、場面や目的に応じて適切に反応する。
- イ 関心のあることについて相手に質問したり、相手の質問に答えたりする。
- ウ 情報や考えなどを、場面や目的に応じて適切に伝える。
- エ 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えをまとめ、発表する。また、発表されたものを理解する。

また、内容の取り扱いの部分では「(1) 中学校における音声によるコミュニケーション能力を重視した指導を踏まえ、話題や対話の相手を広げたコミュニケーション活動を行いながら、中学校における基礎的な学習事項を整理し、習熟を図るものとする。(2) 読むこと及び書くことも有機的に関連付けた活動を行うことにより、聞くこと及び話すことの指導の効果を高めるよう工夫するものとする。」とあり、コミュニケーション能力を養うことを重視したものになっている。

「オーラルコミュニケーションⅡ」における言語活動は以下のようにになっている。

2 内容

(1) 言語活動

「オーラルコミュニケーションⅠ」の内容(1)に示すコミュニケーション活動に加えて、次のようなコミュニケーション活動を行う。

- ア スピーチなどまとまりのある話の概要や要点を聞き取り、それについて自分の考えなどをまとめる。
- イ 幅広い話題について情報や考えを整理し、効果的に発表する。
- ウ 幅広い話題について、話し合ったり、討論したりする。
- エ スキットなどを創作し、演じる。

「オーラルコミュニケーションⅡ」になると内容はスピーチ、討論、スキット制作など、「オーラルコミュニケーションⅠ」で学んだ基礎の上にレベルの高い活動内容となっている。その活動を円滑に行うために、指導上の配慮事項として「まとまりのある話を聞きながら必要に応じてメモを

取ること。」、「発表や話し合い、討論などの活動に必要な表現を活用すること。」、「話し合い、討論などの基本的なルールや発表の仕方を学習し、それらを活用すること。」など、細かく記載されている。

学習指導要領で定められている事項が実際の教育の場で学習されていれば中学校、高等学校の6年間でかなりの英語コミュニケーション能力を身に付けることができるにちがいない。それにもかかわらず英語の「聞く」、「話す」能力の学習効果が思うように表れていないのが実情である。

2. リスニングの指導

リスニングは言語習得に必要な4技能の中でも基本的なものである。基本的であるということは母語の習得を考えると、人はまず相手の言ったことへの理解、すなわちリスニング活動から始めてスピーキング活動、その他の活動へと移る。人とコミュニケーションを成立させるとき、まず相手の言うことを正確に聞き取ることができなければ自分はどうに反応してよいかわからないし、意見を述べることもできない。そのような意味でリスニングの指導は優先順位が高いはずであるが、英語教育の場では残念ながらスピーキングの指導と同様にあまり進んでいないのが現状である。現時点では主な教材は印刷教材であるから、とかくリーディング主体の指導になってしまい、音声面の指導が副次的なものになってしまいがちである。そこから当然のことながら音声教材の開発も印刷教材と較べると遅れている。リーディング、ライティングの能力に優れていてもリスニング、スピーキングはどうも、という人は決して少なくない。ではなぜリスニングの習得が不得手であるという人が多いのであろうか。その理由の主なものとして以下の4点が考えられるであろう。

- (1) 音素の識別ができない
- (2) 語彙と文法力の不足
- (3) スピードについていけない
- (4) 話題に関する背景知識の不足

「音素の識別ができない」は前述したように、英語と日本語の音声体系が大きく異なるため、対比による練習をはじめとして様々な方法で意識的に音声面の学習を行うことが必要である。「語彙と文法力の不足」に関しては日頃教室で実感していることでもある。英文を聞き取る作業をするとき、聞き取ったままと理解できることが最も望ましいことであるが、実際にはそうはいかない。その場合、次に行くことは自分の持っている英語力を総動員して、聞き取れなかった箇所を補う。しかも瞬時にそれを行う必要がある。しかし、その頼みの英語力が十分でないときはお手上げの状態になってしまう。語学学習を行うときの4技能は全て連動していて一つ一つを切り離すことはできないが、リスニングの活動を行う際には特に語彙力、文法力は非常に重要な要素である。スピーキングの活動においても語彙、文法は重要ではあるが、リスニングと異なる点はスピーキングはあくまでも自分が主導で行う活動であるから、自分が持っている語彙、文法の範囲内で収めればよいのであるが、リスニングに関してはそうはいかない。相手次第なのである。「スピードについていけない」も前述の通り、英語のリズムに精通していない故の結果であろう。「話題に関する背景知識

の不足」も当然のことで、逆に話されている話題が自分の得意分野であれば多少語彙、文法に自信がなくても理解することが可能であろう。その意味で出来る限り様々な分野の事柄に興味を持ち、知識を蓄積していくことも英語力を増強する上で重要な要素といえる。英語を「聞く」という中には、英語の音声を識別できているかということと、その内容の理解ができているかという、二つの面がある。リスニングの学習をするとき、その最終目標は相手の言う事を一度聞いてその内容を把握できるようになる、ということであるから、リスニングの指導を行うにあたっては、英語の音声を学習者の耳に定着させるために英語を聞く分量を可能な限り増やし、学習者は英語の音声に可能な限り晒されることが望ましい。現時点では科学的根拠を持ち、誰にでも適用される決定的な英語リスニング学習法というものは確立されていない。かつては基本文型の模倣暗記を中心においた Audio Lingual Approach が外国語教育界で一世を風靡し、1970年代以降は Communicative Approach が主流となった。その後 LL 設備の設置、ビデオ、DVD、CD の急速な普及、音声多重放送、CAI、CALL と、学習環境は多様化した。特に近年の DVD の普及により外国の映画、その中でも英語圏の作品の殆どが入手可能となり、教材として英語の字幕付きで映画の利用が容易にできるようになった。数年前まではビデオで closed caption の表示のあるものに限り、ビデオデッキとモニターの間にデコーダーを接続することによって英語の字幕が表れるというものであった。しかもこの字幕は文字数の関係で 100 パーセント台詞通りではなく、長い台詞は別の表現になっていた。その点でも DVD の字幕はほぼ台詞通りであるからリスニング用教材として適しており、英語学習者にとってはありがたい存在である。

3. リスニングの学習とディクテーション

英語のリスニング能力を伸ばす学習方法の一つとしてディクテーションがある。ディクテーションの効果については賛否両論がある。ディクテーションの練習を繰り返してもリスニング能力の向上には結びつかないという結果も報告されている。一方、シンプルな学習法でありながら、続けることによって聴き取りの力が飛躍的に向上し、確実に定着するという説もある。ディクテーションはリスニング力を付けるための学習方法というよりはむしろ、音と語の結びつきについての知識や文法事項の理解力を高めるための学習法といえるかも知れない。いずれにしてもディクテーションは全体的な英語力の評価の材料としても使える。ディクテーションを行うことによって聴解力、語彙力、文法力、そして書く力をトータルで見ることができよう。ディクテーションとは「英語を聴き取って書き取ること」であり、その方法も英文の中につくられた空所を埋める方法、英文のほぼ全体を書き取る方法、と二つある。ディクテーション推進派はディクテーションの効果として次の点をあげている。

- (1) 英文の細部まで聞き逃さず、正しく把握する力が身につく
- (2) 単語、熟語などが意味や使い方と共にしっかり記憶に残る
- (3) 文法が身につくことで文の構造をとらえる力が増し、聞きながら意味をすばやく判断できるようになる

ディクテーションは自分で学習しようとする学習者にとっては特に適した学習法であるといえよう。

「English in LL」の一部のクラスでは各レッスンの一部にディクテーションによる練習を加えている。これはほぼ12語～15語からなる英文を2文、全文書き取るもので、各自他の問題を終了してから時間があれば行うように指示をし、授業時間中には正答を与えていない。後日、それらの中から8文を選び、改めてディクテーションを行った。英文は2組用意し、クラスによって使い分けた。その英文は次のようなものである。

Group A

1. Do you prefer to dress casually on vacation to feel more comfortable?
2. Have you read about the incident that occurred in the tunnel yesterday?
3. Would you like to watch a bilingual movie to practice your English?
4. Why don't you turn on the light if you find it too dark to read?
5. Don't miss the special exhibition of Dutch paintings at the gallery.
6. I often get caught in traffic jams during rush hour on my way to work.
7. I'd like to make a reservation for the 9:15 train to Himeji.
8. Get off the bus at 42nd Street and walk toward the United Nations.

Group B

1. The role of jeans was at first that of working clothes worn by miners.
2. Lack of rain during the rainy season often causes a water shortage.
3. I wonder what kind of TV programs foreigners are interested in.
4. As soon as I got well, I tried hard to catch up with the rest of my class.
5. Established in 1896, our university offers a number of unique courses.
6. Without a car you'd be completely lost on the West Coast.
7. Join an English-speaking tour when you visit Kyoto for the first time.
8. New York City is a melting pot of various ethnic communities.

ディクテーションを行った対象者は194名であったが、英語の音に関して聞き取り難い音、間違え易いのはどのような箇所か、また、間違え方にある程度の共通点は見られるか、を中心として回答の内容を見てみることにする。厳密なデータに基づいての分析ではないが、おおよその傾向については判断がつくのではないかと考える。

Group A

1. Do you prefer to dress casually on vacation to feel more comfortable?

Do you prefer...の部分はかなりの割合で聞き取れているが、それに続くto dress...が聞き取れている数は極めて少ない。最も多いのはthe dressであり、次に多いのはただ単にdressであっ

た。この間違いは機能語である to が聞き取れないと同時に文法力の不足からと思われる。熟語の on vacation は約半数が聞き取り、かなり定着しているものと考えられる。次の to feel more comfortable の to feel を書くことができたものは一割にも満たず、feel のかわりに同じ/f/の音で始まる fill, fear, few, などで代用をしているものがあり、これは語の意味が取れない語彙力の不足であろう。この場合も不定詞の to は聞き取れていないものが殆どである。casually は決して聞き取りにくい語ではないにも拘らず聞き取れている割合が少ないのは、これも語彙の不足によるものにちがいない。comfortable はかなり聞けているが、more とはつながっていない。

2. Have you read about the incident that occurred in the tunnel yesterday?

ほぼ全員が聞き取れている箇所は、Have you と yesterday であった。read は以外と聞かれていない。次に incident は約半数が聞き取れていたが、insident とスペリング の間違いが多く見られた。tunnel に関しては授業の中で触れているにもかかわらず、日本語のトンネルと音声の面で大きく変わるため、聞き取れている割合は1割にもなっておらず、occur という動詞は馴染みがないとみえて、書かれているものは10名にも満たない。全文正確に書き取れているものは無く、正解に近いものは次の2文である。Have you read about the incident that the car in the tunnel yesterday? Have you read about the incident that the occur in a tunnel yesterday?

3. Would you like to watch a bilingual movie to practice your English?

Would you like to watch までは9割近くが書き取れているが、中には少数ではあるが to が無いものがあった。1割近くの正解者があったが、殆どが書き取られていても your が聞き取れていないもの、a のないもの等、機能語を聞き落としたというケースも少なくない。bilingual が正しく綴られているものも少なく、vilingal, bilingual, vilingul, vilingaru, 等、様々な綴りが登場している。

4. Why don't you turn on the light if you find it too dark to read?

正解者はなく、最も近いもので、Why don't you turn on the light if you find it to dark to read? であった。この場合のように、too~to の形を取らない回答もかなりの数にのぼる。又、下線部分の it は聞き取れているが、it を聞き取っているものはあと1名のみであった。文頭の Why don't you は殆ど問題なく書かれている。Why don't you turn on the light まで書かれているものも約3割程あった。dark を dog と聞き間違えるケースも多く、後半部分が if you find two dogs to lead というものもあった。

5. Don't miss the special exhibition of Dutch paintings at the gallery.

この文では多くの場合、大筋では内容が理解できる程度書き取られているが、正解はない。それぞれ細かい所で間違いがある。Don't miss まではほぼ全員が書いているが、the のないものが多く、Dutch が聞き取られていない。そして exhibition, gallery の正しい綴りは殆ど見る事が出来ない。

6. I often get caught in traffic jams during rush hour on my way to work.

get caught を正しく書くことができているものはわずか3名であり、in を聞き取っているも

のは殆どいない。during rush hour は during the rush hour と the が入っている場合は多いが、多くが書き取っている。又、on my way to work は句としてそのままの形で定着しているためか、比較的多くの学生が正しく聴き取っている。

7. I'd like to make a reservation for the 9:15 train to Himeji.

これは他の英文と較べると比較的聴き取り易かったようで、正解率が最も高かった。I'd like to make まではかなりの割合で書かれていたが、make a reservation とつながっていない。9:15 train to Himeji も聴き取り易かったようである。

8. Get off the bus at 42nd Street and walk toward the United Nations.

ここで目立つのは前置詞、at, toward が聴き取れているものが少ないことである。Get off the bus は比較的聴き取れているが、なかには Get up としたものが多かった。get と聞くと up とつながり易いためと思われる。

Group B

1. The role of jeans was at first that of working clothes worn by miners.

この英文は構文の上で難しいようで、まず that of, worn by が聴き取れないこと、次に語彙、熟語の面から role, miners が正しく書かれておらず、role は roll, road で代用され、clothes は close になり、at first は the first となっている場合が多かった。

2. Lack of rain during the rainy season often causes a water shortage.

Lack of rain の箇所、まず lack という語に馴染みがなさそうなこと、そのため luck, lark などが代わりにみられ、又、圧倒的に of rain を brain と聞き違えている。the が無い場合もあるが、during the rainy season は比較的よく聴き取られている。shortage が正しく綴られているのは1名のみであった。

3. I wonder what kind of TV programs foreigners are interested in.

I wonder が殆どの場合で I want となっており、I wonder と聴き取れたものは1名のみであった。what kind of TV programs は良く聴かれていたが、後半部分の foreigners, are interested in を聴き取ったものはいなかった。最も正解に近いものは followers are interested in であり、for interested in, あるいは interested in のみが書かれているケースが多くみられた。

4. As soon as I got well, I tried hard to catch up with the rest of my class.

As soon as I got well, I tried hard までは約9割の学生が正しく書いていたが、to catch up with の to は殆ど聴き取られておらず、rest も意味が取られなかったためか、書かれていなかった。

5. Established in 1896, our university offers a number of unique courses.

この文は文法的にも語彙の上からも難しかったようである。まず、establish という語を知らないものが多く、まして established という形には馴染めなかったように思われる。さすが in 1896 は聴き取れていたが、our university の our が are となり、offer が open という語に代わっている場合が多かった。a number of は the number of が多く、unique courses も書きにくかったようである。

6. Without a car you'd be completely lost on the West Coast.

Without a car の部分は約半数が聴き取っていたが、後半は殆どが意味を理解できなかったように思われる。you'd be を聴き取る事ができなかったこと、be lost が分からなかったこと、そして West Coast が何を意味するかの知識がなかったためであろう。

7. Join an English-speaking tour when you visit Kyoto for the first time.

この英文は比較的聴き取り易かったようで、概ね書けていたが、Join an English-speaking tour の an を聴き取っているものは非常に少なかった。for the first time はかなり浸透しているように思われたが、そのように書いたものは約半数で at the first time, あるいは first time だけというものが多くみられた。

8. New York City is a melting pot of various ethnic communities.

New York City だけは全員聴き取れていたが、全文正しく書けていたものはいなかった。特に melting pot に対する知識はなかったようであるし、various, ethnic, communities, それぞれの語を正しく書いているものは僅かであった。

ディクテーションの内容を概観した結果、予測通り多くの学生の語彙、及び文法力が十分でないことが改めて確認された。語彙の面からいうと、書き取れない率の高かった語のうち、occur, Dutch, clothes, lack, wonder, rest, establish, offer, unique, various, community は一般には中学校で学ぶ語彙のリストの中にあり、incident, casual, exhibition, gallery, reservation, miner, shortage は高校では学んでいる語であるとされていて、決して難しい語ではない。特に occur, clothes, wonder, offer, various, community は大学英語教育学会によって作成された、使用頻度からみた基本語リストの上位1,000語以内の中に含まれている。文法の面では聴き取れなかったということもあろうが、明らかに不定詞で to が必要であるにもかかわらず書き取れていないということは文法力の不足といえるであろう。wear の過去分詞 worn も当然知っておいて欲しい語であるし、if you find it too dark to read の it, too~to の形、分詞構文 Established in 1896, 仮定法 Without a car, you'd be completely lost ..., 前置詞等、文法の知識があれば耳で聴き取れない部分を補うことができたかも知れない。又、英文の背景に関わる事項に対する知識の不足も無視できない。最近では salad bowl の方が多用されるにしても、まだ良く耳にする melting pot を知っていれば書き取れていたにちがいないし、国連が United Nations, カタカナ英語としてよく登場する the West Coast も常識として身に付けておいてほしいものである。

4. おわりに

人間社会学部では English Reading A のクラスは入学時のオリエンテーションの際に行うプレースメントテストの結果により能力別のクラス分けを実施している。又、English in LL の授業では学生の英語聴解力テストを行っている。プレースメントテストは非常に簡単なものであるが、学生の英語語彙力、文法力を見るものである。これら二つのテスト結果に何らかの関連があるかを

見てみることにする。English in LLは春学期、秋学期に開講されるので、今回の対象者は一年次生のうちの約半数であるため、春学期に履修が終了した一学科の結果のみを比較してみたい。まず、プレースメントテストにおいて調査対象学科の中で最高点、72点を取得した学生は二名いるが、聴解力テストでは48点、475人中204位と46点、252位である。以下、同様にプレースメントテスト上位者をリストにすると次のようになる。

<u>プレースメントテスト</u>	<u>聴解力テスト</u>	
72点	48点	204位
72	46	252
70	58	54
66	54	93
64	38	404
64	52	125
64	54	93
62	60	43
60	58	54
58	36	427
58	46	252
56	64	27
56	46	252
54	40	382
54	60	43
52	50	162
50	34	446
50	54	93
50	50	162

ちなみに、聴解力テストで当該学科の中で最高得点68点の学生はプレースメントテストでは30点、578名中386位であった。これらの数字から英語を聴き取る能力と英語の語彙力、文法力とは必ずしも相関性が高いとはいえないことを見てとることができる。英語を正しく聴き取るためには英語の語彙、文法の力が必要なことは言うまでもないことであるが、その逆の英語の基礎力があってもそれがリスニングの能力に結びつくとは限らないことがわかる。英語の何れの技能を伸ばすにしても、英語の基礎力は必須のものであるが、リスニングの力を付けるにはそれなりの努力を必要とする。まず何はともあれ、英語の音声に可能な限り触れることであるが、それもただ聴けばいいというものでもないであろう。当初は何度聴いても聴き取ることのできない音、表現は当然ある筈で、その際に聴き取れなかった音、表現が何であったか、確認するすべのある材料を使うということである。

これはスクリプトのある音声テープなり、映像を使う。それに加えるに、この作業は長続きするものでなければならないから、素材は学習者の興味を引くものでなければならない。それらの要素を考慮すると、学習者は自分の好きな映画を選び、それを繰り返し観ることで英語を聴き取る耳を作る、ということが最も実地的な学習法ではないかと思われる。まず初回はDVDの日本語字幕でその作品のストーリー、背景を理解する。二回目以降は英語の字幕で主として英語の音声を聴くことにポイントを当て、聴き取れない箇所は英語字幕で内容を確認する。長い台詞は静止画像にしなければ読みきくことはできないであろうから、その都度手間はかかるが、そのような作業を繰り返すことによって初めは聴く事ができなかったものが、除々ではあっても聴くことができるようになるにちがいない。映画の利用以外でもそれぞれの学習者が自分に合った方法によって楽しみながら地道な努力をする事が当然のことではあるが、リスニングの力をつける近道ではないかと考える。

参考資料

- | | |
|-----------------|-------------------------|
| 「高等学校学習指導要領」 | 平成16年1月 |
| 「中学校学習指導要領」 | 平成16年1月 |
| 「これからの学校英語」 | 田辺洋二著 早稲田大学出版部 2003年 |
| 「英語指導の基本」 | 池永勝雅、小笠原八重著 桐原書店 1990年 |
| 「英語の新しい学習指導」 | 伊藤健三、伊藤元雄著 リーベル出版 1995年 |
| 「英語リスニング論」 | 武井昭江編著 桐原書店 2002年 |
| 「英語リスニング科学的上達法」 | ATR人間情報通信研究所 講談社 2001年 |